これからの幼稚園問題

文部省調査部　多田鐵雄

まへがき

これからの在るべき幼稚園の姿は制度の問題と關聯して來るので、こゝでは觸れない。實際にどう成つて行くであらうかと云ふことは、戰火に痛手を負つた幼稚園界、子供に對する關心を失つてゐる今の社會のありさまでは、あまりに前途が暗い。けれどもこの苦境を乘り超へ、明るい未來の建設に精進するのが幼稚園關係者の使命である。かう考へながらこの一文を草した次第である。

一

就學前兒童の問題に關する參考資料として、この四月に文部省文書課調査係（所謂教育調査部）で國民學校新入學兒童に對する調査が行はれ、現在整理中であるが、その内で既に明かにされたものに次のやうなことがある。但しこれは時局柄、東京都、神奈川、千葉、群馬、埼玉の諸縣だけを對象としものであるが、右五部都下に於ける最も大なる都市、僻陬なる村落、及兩者の中間に位する町村に所在する任意の國民學校を都縣當局に選んでもらひ當該學校教員の手を煩はして行はれたものである。

1、文字を全然知らぬもの

	大都市	中間町村	僻陬村落
男	一四六五人中二三二人（一六%）	八七〇人中二八〇人（三二%）	
女	一四七六人中二三二人（一六%）	八四一人中二四〇人（二九%）	
計	二九四一人中四六四人（一六%）	一七一一人中五二〇人（三〇%）	

	僻陬村落
男	三六八人中一七八人（四八%）
女	三九九人中一八九人（四七%）
計	七六七人中三六七人（四八%）

2、自己の氏名を片假名にて讀み得るもの及び略其の程度のもの

	大都市	中間町村	僻陬村落
男	六九二人（四七%）	四〇一人（四六%）	一二六人（三四%）
女	七一八人（四九%）	三九〇人（四六%）	一五一人（三八%）

計四一〇人(四八%)　七九一人(四六%)　二七七人(三六%)

3、片假名全部を讀み得るもの及び略其の程度のもの及びそれ以上のもの

	大都市	中間町村	僻陬村落
男	三三一人(一三%)	九八人(一二%)	三五人(一〇%)
女	三二七人(一二%)	一一九人(一四%)	三一人(八%)
計	六五八人(一二%)	二一七人(一三%)	六六人(九%)

4、數に關し具體的事柄につき五まで數へ上げ得ぬもの

	大都市	中間町村	僻陬村落
男	一一九人(八%)	七五人(九%)	七二人(一〇%)
女	九二人(六%)	五七人(七%)	七一人(一八%)
計	二一一人(七%)	一三二人(八%)	一四三人(一九%)

5、十までの數につき加減し得るもの及其以上可能なるもの

	大都市	中間町村	僻陬村落
男	三七一人(二五%)	一四三人(一六%)	六一人(一七%)
女	二六六人(一八%)	一五二人(一八%)	五一人(一三%)
計	六三七人(二一%)	二九五人(一七%)	一一二人(一五%)

右によると、文字を全く知らぬものは一般都市町村では一割六分から三割、僻陬の村落でも五割には達してゐない。即ち極めて低く踏んでも新入兒童の半數以上はどの程度にか文字を知つてゐるのである。次に數については、具體的事物につき五まで數へ上げ得ぬものは七分乃至一割九分(この中には二乃至四までは數へ得るものも當然含まれるわけ)で、一方「十までの數につき加減し得るものが」一割五分乃至二割一分に達してゐる。この後者については、之を純粋に數觀念が出來てゐるとは斷定し難く(波多野完治著、兒童生活と學習心理、山下俊郎著、幼兒心理學參照)、その問題は別に尙一層嚴密なテストを俟つべきではあるが、一應國民學校教員によつて下されたこの判定は、それなりの判定として承認してよいと思ふ。以上に依つて就學前に幼兒の生活に於て文字と數がどの程度に入つてゐるかが明らかである。即ち特殊の家庭を除けば幼兒の關心を無視して强制的に文字を教へ込むことはないと考へ得る故に、幼兒が、文字に關心を持ち初めてから自己の氏名を片假名で讀み得るに至る期間を平均三ケ月、片假名全部を讀み得るに至る期間を六ケ月乃至一ケ年(共に數年に渉る一幼稚園での實驗による)とすれば、若干の幼兒を除けば幼兒に於て文字に對する關心が普遍的であり、早いものは就學前一年半頃より起るものもあることを示してゐる。次に數については一と多の區別だけの時代から進んで具體的事物の數へ上げから數の觀念の獲得までに三年以上を要すとする通說から云つて、新入兒童中十までの數につき加減し得るに至つた二割前後のものの就學前の數生活は相當の長さのあることが推定出來るし、具體的事物につき五まで數へ上げ得なかつた一割前後のものを除いた兒童の就學前の數生活も或程度の幅を持つてゐることが推定出來る。常識的に幼兒の遊びの中に於ける數を想起しても、このことはう

なづける。とすれば文字や數は果して何處で教育し初め、如何に教育すべきかと云ふ問題が當然起る。

二

このことは兒童及幼兒に關して、一面に於ては國民學校低學年教育の再檢討を要求するものであると同時に幼稚園に於ける幼兒の知的方面に對する考究の要を示すものであり、それは延いては幼稚園園制度の普遍化の問題となつて來る。元より幼稚園の課題の中では、幼兒の知的方面は重要なものの一つではあるが、決して第一のものではない。幼稚園教育乃至保育の使命はつねに論ぜられ、主張せられてゐるが故に今又こゝで採り上げる必要はない。幼兒の生活指導、保健問題等第一義的なものを措いてこゝで文字と數の問題を提出した所以のものは、世人一般が教育と云ふと、直ちに學校教育のみを考へるが故に、かかる點に於ても幼稚園はもつともつと問題にされるべきだと云ふ一論據を示しておきたかつたからである。實際、我が國の親達が子供を愛する點に於て何處の人々にも劣ることがないにも拘らず、そして偶々自分の子供をどうしたらと云ふ時には、今の幼稚園は面白くないの、何處の幼稚園は良いから是非あそこへだの、託兒所がもつと出來てほしいの、子供の遊び場がないだのと、色々と云ふくせに、町村として、府縣として、更に國家として、幼兒保育施設が、かくかくのものがかくかくの如くに設置されねばならぬと云ふやうな主張を持つてくれぬことが不思議な位である。

三

幼稚園關係者は夫々幼稚園を理想に近付けて行くために、幼稚園を普及させるために、懸命の努力をつづけてゐる。それにも拘はず世間は一向にこれを支持してくれぬ。今度の議會にしても教育關係議員が澤山選出されてゐるにも拘らず、幼兒教育のことはあまり問題にされてゐない始末で、これからの幼稚園と云ふことを考へるとき、何よりもこの世間の啓蒙が第一であることを痛感するのである。この意味に於て先頃の米國教育使節團報告書中の「兒童成長發達の確實な原則から見て學校施設を小學校以前の幼兒にまで及ぼすことの賢明なことが分る。我等は正規學校組織に必要な改革が行はれ適當な經費が支給せられた曉には保育學校や幼稚園を更に更に多數設立して、之を小學校と密接な關聯に立たせることを勸奬する」の言葉の趣旨を一般に徹底さすべきであらう。

戰爭のために荒廢した幼稚園の現狀については今更云ふを要せぬであらう。然し世に流行の民主主義化の如きは、眞劍に幼稚園教育を考へて來た人々に取つては「何を今更」と以外に言葉はないであらう。たゞ戰爭中、似非愛國が横行した如く、幼稚園界にも似非教育者が相當踊つてゐたことは否めないことであつたらう。そして眠らされ、抑壓せられてゐた世間の良識が一とたび眼醒れば彼等の正體が暴露されて來る如く、幼稚園が社會から重要視され注視されるに至れば、似非幼兒教育者は自ら影を沒して行くであらう。云ひ換へれば幼稚園の普遍化こそ幼稚園を向上させて行くのである。これからの幼稚園は普遍化せねばならぬし、普遍化させねばならぬ。